

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

戦場のピアニスト

配給/アミューズピクチャーズ

2003 (平成15) 年2月16日鑑賞

Data

監督: ロマン・ポランスキー

出演: エイドリアン・プロディノト
ーマス・クレッチマン

👁️👁️ みどころ

1939年9月のナチスドイツによるポーランド侵攻。ここから第2次世界大戦が始まり、ユダヤ人は徹底的に「排除」され、1942年には「ガス室送りの決定」までなされた。そんな中ポーランドの首都ワルシャワで、奇跡的に生き延びた一人のピアニストがいた。ポーランドを代表する実在のピアニストであるシュピルマンだ。ポーランドの誇りである「ピアノの詩人」ショパンの曲が美しく流れる中、悲しくも感動的な人間ドラマが展開される。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ナチスドイツによるポーランド侵攻>

1939年9月1日、ナチスドイツは宣戦布告のないままポーランドへ侵攻した。そして9月3日、英、仏は直ちにドイツに宣戦布告し、ここに第2次世界大戦が始まった。しかし1ヶ月足らずの間にポーランドは全面降伏を余儀なくされ、以降数年間にわたる苦難の時代が始まった。ポーランド侵攻のその日、ユダヤ人ピアニスト、ウラディクことウラディスワフ・シュピルマン (エイドリアン・プロディ) は、ポーランドの首都ワルシャワのラジオ局でショパンを演奏していた。

<ポーランドの首都ワルシャワは・・・>

ポーランドはユダヤ人に対して比較的寛容だった。そのためパレスチナの地を追われ、世界各地へ離散したユダヤ人のうち約300万人がポーランドに留まったと言われている。しかし、ナチスドイツ侵攻後のワルシャワは、独ソ友好条約の下、西部をドイツが、東部をソ連がそれぞれ支配し、ワルシャワを含む中央部はドイツ人総督が「統治」することになった。

<ナチスによるユダヤ人政策>

ナチスドイツがユダヤ人を徹底的に「排除」しようとしたことはあまりにも有名だ。高さ3mの壁が作られ、約50万人のユダヤ人は、この「ゲットー」の中だけでの生活を強いられた。そしてありとあらゆる非人間的差別の中、ユダヤ人は次々と死んでいった。1942年1月、ナチスは「ユダヤ人問題の最終的解決」を決定した。これはゲットーの解体とユダヤ人の絶滅（ガス室送り）を決定した恐るべき内容であった。ナチスドイツ時代のユダヤ人の苦難やその中で懸命に明るく生きていこうとする姿を描いた作品は数多く、『シンドラーのリスト』（1993年）をはじめ、最近のものでは『ライフ・イズ・ビューティフル』（1998年）や『聖なる嘘つき—その名はジェイコブ』（1999年）等があるが、いずれもとにかく泣けて泣けて仕方がない名作だ。

<ピアニスト、シュピルマン>

シュピルマンは実在の人物であり、ポーランドを代表する有名なピアニストだ。ユダヤ人の彼が、この激動の時代のワルシャワでゲットー生活を送ったこと、ゲットーからの脱出後、あのアンネフランクと同じように隠れ家の中にじっと身を潜めて隠れ続けたこと、そして数々の危機を乗り越え、戦後またピアニストとしての生涯を全うしたことは、ほとんど奇跡に近い出来事だ。そして忘れてならないことは、この奇跡の背後には後述のドイツ人将校をはじめとする多くの人たちの献身的な協力があったことだ。

<ショパンの『ノクターン』とベートーベンの『月光』>

映画の冒頭、放送局で弾く最初の曲であり、また再開後の放送局で弾く最初の曲は、『レント・コン・グラン・エスプレッションオーネ』というタイトルのついているショパンのノクターン第20番嬰ハ短調（遺作）だ。

先日約30年ぶりに約10時間をかけて3本を通して観た、日活の超大作映画『戦争と人間』の中で、浅丘ルリ子がかっこよく弾いていたのがショパンのエチュードハ短調『革命』、そして映画『愛情物語』で使われた、ショパンの最も美しいノクターンがノクターン第2番変ホ長調9—2だ。この2つの曲ほど有名ではないものの、この第20番嬰ハ短調も心にしみわたる美しい曲だ。

他方、廃墟の建物の中に隠れていたシュピルマンが聞いたのは、ベートーベンのピアノソナタ『月光』。当然ドイツ人の誇りの曲だ。このようにショパンとベートーベンが対比されるのを見るのは初めてだが、すごく興味深い。

<物語の深みを増すドイツ人将校の登場>

ソ連軍の反攻が迫り、ナチスドイツの敗退が明らかになる中、シュピルマンは廃墟の中でドイツ人将校ヴィルム・ホーゼンフェルト（トーマス・クレッチマン）に見つけられて

しまった。そこで当然、「お前は何者だ?」、「職業は?」と尋問される。シュピルマンは「ピアニストだ」と答えた。するとホーゼンフェルトはシュピルマンをピアノのある部屋に案内し、「何か弾け」と命じた。

1939年9月1日のナチスドイツによるポーランド侵攻から数年を経た今、シュピルマンが弾くショパンはホーゼンフェルトを感激させ、一人のピアニストの命を救うことになった。これもすべて実話だ。この人道主義者のドイツ人将校ホーゼンフェルト大尉は、シュピルマンの他にも数名のユダヤ系ポーランド人を救っていたが、ナチスの敗退により、ソ連軍の捕虜となり、スターリングラードの戦犯収容所で1952年に死亡したとのことだ。

<ラストのピアノ協奏曲>

ナチスドイツは敗退し、ヨーロッパは解放された。これによりシュピルマンは放送局でのピアノ演奏を再開し、さらにその後ピアニストとして精力的な演奏活動を展開した。映画のラストシーンは、演奏会場でのシュピルマンの演奏だ。ピアノの鍵盤の上でシュピルマンの指が踊る。曲はショパンのアンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ変ホ長調作品22（ピアノ協奏曲）。字幕が流れていく中、ずっと続くこの曲を静かに聴いていると、音楽の素晴らしさに酔うだけでなく、あのゲッソーの中で別れ、殺されていった多くのユダヤ人たちのことを次々と思い出してしまう。何とも美しく、もの悲しく続くラストシーンだ。

<アカデミー賞の行方は・・・>

この『戦場のピアニスト』は、2002年5月第55回カンヌ国際映画祭でパルムドール（最優秀作品賞）を受賞した。そして第75回アカデミー賞では作品賞等7部門にノミネートされている。この最大の対抗馬が、私が2月13日の試写会で観たミュージカル映画の『シカゴ』だ。『シカゴ』は、とことん陽気で楽しく、いかにもアメリカそのものという映画。これに対し『戦場のピアニスト』は、とことん人間的な映画で対照的な作品だ。私としては、少なくとも作品賞はこの『戦場のピアニスト』に期待しているが、果たして結果は・・・。

2003（平成15）年2月17日記